



Title	ナホトカ号事故から幾年ぞ. 2
Author(s)	敷田, 麻実
Description	石川版朝刊33面掲載、金沢アンダンテ
Citation	朝日新聞
Issue Date	2003-08-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34968
Rights	本著作物は、朝日新聞社の許可のもとに掲載しています。朝日新聞社の許可なく内容の全部又は一部を転載することを禁じます。承諾番号25-2832
Type	article
File Information	1284.pdf



敷田 麻実 ④

ナホト力号事故
から幾年ぞ(2)

金沢工業大教授

1997年1月7日午後、北安江にある水産会館の会議室は騒然としてい

題字は五木寛之氏
かりだった。そんな中に重油漂着の報が入った。それは実は誤報だったのだが、

口からでた言葉だが、今も適切な言葉だったと信じている。
と言っても当時の会議場では、正直なところこの発言は「せせら笑われ」た。

海で生活する漁業にかかわる水産課は、ナホト力号事故で一躍注目を浴び、対策の中心になった。自画自賛ではなく、当時の水産課には練度の高い職員がそろっていた。金融や法令に強いY専門員、許可を始め水

対策の基本は冷静

た。すでに「海に壊滅的打撃」などのセンセーショナルなマスコミ報道で、漁業関係者は高揚していた。県も具体的に何を指示するのか明確ではなく、懸命に取りなすが、連鎖反応のように噴出する憤慨は高まるばかり

たちまち、県や水産課に対する非難の声があがり、会議どころではなくなった。この時のエピソードとして、今も印象に残っている

重油流出事故対策の会議で、何をのんきにと思われたいのだらう。しかし災害対策の本を読めば、それが対策の基本だと言ふことは書いてある。少なくとも専門家は冷静でいなければなら

る海が汚染されるかという産行政全般に明るいF技師など、いずれも、県庁には珍しく10年以上異動していないベテラン職員だった。彼らは、水産業に精通しているうえに、県庁内の他の部署の仕事もよく知っていた。そのため、職務や自分の専門を超えて、広い視野で対策にあたることができ



15年間勤めた県庁を退職した日、同僚らと(中央後ろが敷田さん) 98年3月、(敷田さん提供)

た。それが大きな力になった。こちらは徹夜続きの事故対策だったが、対応の遅さも含めマスコミや県民から批判されることが多かった。しかし、「最悪の状況で最善の結果を出す」、これが公務員の仕事だと思った。また、海とかわる仕事をしていた、この時ほど「海を守る」ことに使命感を感じたことはなかった。県に勤めてから13年目、新春の朝は苦かったが、光っていた。

(金沢工業大教授)